

親しき事なにもいはれず。たとへ命をくれよとあらば、はや畏候と可申様の心地す。たとへば信玄は、命をくれよとあらば、思案をしてのうへの事と思ふやうなり。さすが天下をしらるゝ人は格別なる事といはれしとぞ。

一、深見新右衛門、鳩巢先生の文を評す

鳩巢先生深見の文章は、古今に傑出する由、其道しれる人は稱せずと云事なし。或時白石先生新井氏深見新右衛門深見は曾く御世に通ず。及鳩巢同席に在て説話あり。白石、鳩巢の文章を深見に示して巧拙を問ふ。深見大に感稱し、大家の文に差ふ事なしと云。白石曰。誰も一通は左様に云事也。聊無挨拶存念被申よとあれば、深見更ば少も無遠慮申て見んとて、不閑の一字を替して、是迄也とあり。兩先生其意を不解如何と問。そこにて深見被申候は、華人の辭は閑也。鳩巢の文、四大家等の文章に不差様にと、心を着たるもの故に不閑の處あり。此所迄也と云。兩先生深く心服せりとぞ。

一、東山天皇の御聲

寶永年中皇居延燒の時、御車奉寄候處、主上高らかに内侍所や渡らせ給ふ〜と勅諭なり。奉供の人々地に伏て、其

御音聲を承り候に、當時日本の人の音聲に似ず、けだかき御事比類すべきなしと云。後に東山院と奉號是也。世澗季に及といへども亦格別の御事也。

一、木村長門守の首まゐり候時

大阪にて木村長門守首まゐり候時、家康公誰が首と御尋被成候に付、木村長門守首と申上候へば、長州乘て通り候と御鑑を御はづし被成候と云咄あり。御馬上の事如何。夏陣には大かた御駕籠にてはなきか。可考。

愚曰。本多佐州も御陣中、駕籠にて御供なりと云傳し。

一、琉球國天満宮の起り

琉球國天満宮は、封王第十代尙元王の時、古米村の人林氏太夫建しに始まり、林太夫天満宮の事を尊信して「いづくにも梅だにあらば我としれこゝろづくしに外なたづねぞ」といふ古歌を吟じて天神を遙拜す。大明嘉靖中、進貢船の上使となされてかしこにおもむき、禮畢て歸らんとして、漳州より船を發して梅花の海に至る時、船覆て船中百人皆溺死す。林氏は海上忽に時ならず花さきし梅ヶ枝を得て、それに取つきていきぬ。かくて他船して終に本國に歸事を

得ければ、其神恩を感じて天満宮を建つ。中山に此神を祭る事こゝに始れり。又能野八幡宮の神社も處々にありと云。又鎮西八郎爲朝の祠もありと云也。されど爲朝祠の事をとひしに、その答る所のごとき詳ならず心得がたし。今

中山の祖、爲朝に出し由は世系歴々たり。尙元は今王九代の祖にて、古米村には即古米島閩人三十六姓の子孫の住する也。戊辰十月、新井白石氏嘗ての語、小幡御殿の來歴也。

一、小幡氏の庭と葛卷氏の長屋

葛卷氏と小幡氏とは、おなじほとりにいまそかりけり。ある時いと老いおとろへたる尼のまかでけるが、小幡氏の庭に木立常ならず造もてはやされし。是は父にておはせし不入と申す人の、朝な夕なもてあそばれしを、改めやらでそのまゝになん有ける。あませ、父うへのすかせ給ひしを、よく常磐になし置給ふ難有など、ひとりこちて行きしに、葛卷氏の長屋のこけむし、朽かたぶきしをも、もの作りかふる事もなくてありければ、是も亦御孝行の御志かな。三年改めざる道を、よくも守らせ給ふめりとして過ぬ。是は更に孝心にて改めざるにてはあらで、世の中心のまゝ

ならで、造かふる事ならざりしとぞ。誠に上人の感涙むなしきといひしためし、思ひ出てをかしく書記ぬ。

一、彈左衛門と座頭の出入

嚴廟の御時寛文七年、長吏彈左衛門と座頭の出入に付、頼朝の時代、鎌倉定法の御朱印を頂戴仕所の一卷指出者也。

覺

- 髮結 半番 座頭 猿樂 陰陽師 壁師 辻其目 猿引
- 鑄物師 石切 放下 笠縫 辻盆人 鉢叩 弓鎌師 土器作
- 渡守 山守 青屋臺立 筆結 墨師 關守 金掘 獅子舞
- 鑊作 傀儡師 傾城
- 以上二十八品

右の外道の者品多有之といへども、是等長吏に下たるべし。猶更船大工・梓列・盜賊・馬類、長吏とりて可用之者也。湯屋風呂屋は傾城の下に付べし。岩作・皮細工・膠を仕類の者、皆々二十八品の下たるべし。

鎌倉住人 藤原朝臣

年號月

源左衛門尉頼兼

御朱印